

# 万葉集の「中皇命」

—その人と作品—

## 第二部

福 沢 武 一

### (一) 「所知哉」と一歌の心象

中皇命、紀温泉に往き給へる時の御歌  
君が代も吾が代も所知哉磐代の岡の草根をい  
ぎ結びてな (10歌)

一

この問題点は「所知哉」です。まず諸訓を集約すると次のようになります。

シルヤ 旧訓・仙覚抄・宗祇抄・代匠記・略解  
・檜の柚・注疏・松岡氏古語大辞典・金子氏  
評釈・西村氏文化史的研究・斎藤氏(研究・  
歌境・秀歌細字)・佐々木氏新訓・土屋氏(年  
表・短歌文学講座)・今井氏(同講座)・石川  
氏短歌選・女性の歌・中村氏難解歌新説・吉  
永氏文学と歴史のあいだ

シラス 元暦校本

シラレン 僻案抄(所知武)

シラム 宣長説(略解)・燈・攷証・墨縄・檜  
爪・古義・野雁新考・井上氏新考(以上、哉  
を武の誤字とす)、美夫君志・豊田氏新釈・  
折口氏口訳・左千夫新釈・山田氏講義・菊地  
氏精考・全釈・春陽堂講座阿部氏説・正訓・  
正宗氏(総索引・大成)・総合研究・斎藤氏  
秀歌・関氏女流歌人・川田氏女流歌人・池田  
氏日本詩人選・窪田氏評釈・創元社講座(3)西  
角井氏説・大成(10)斎藤清衛氏訓

シルヤ 考・高田与清訓(金子氏評釈)・武田氏  
(総釈・皇室歌人・全講・全注釈・角川文庫  
本)・森本氏(符号本・地平社版・精粹・万  
葉大辞典・創元社講座)・高田氏鑑賞・定本・  
沢瀉氏(新校・大成・誕生・注釈)・佐々木  
氏(評釈・新訂版新訓)・峯岸氏口訳・朝日

古典全書・土屋氏(私注・鑑賞世界名詩選)・  
田辺氏(初期万葉の世界・大成)・大系本・  
村木氏(古典日本文学全集)・都筑氏万葉集  
十三人・神田氏(万葉の世界)・高安氏万葉  
の歌を尋ねて・塙書房版・小学館本・新潮社  
集成本・桜井氏旺文社文庫本

これによると、シルヤが現在定説化していま  
す。ちょっと待ってください。疑わずにいられな  
いのです。「知」でない、特に「所知」と表記さ  
れているのです。

このように書き始めた拙稿を歌誌「歌と評論」  
へ投稿したのは昭和33年1、2月号でした。その  
後、吉永氏に論稿のあることを知りました。氏も  
小生と同じ疑問から説を立てています。ここに一  
端を引用しましょう<sup>(1)</sup>。

なお一言しておきたい。拙稿は、その後の諸書  
を参照して旧稿に増補しました。多少不体裁にな  
ったことを諒承願いたいのです。

「所知」をシルと訓むことは万葉集の用字  
法から考えてうなずけない。すなわち万葉集  
では、「所○」「令○」などは四段活用の連体  
形に用いた例はない。今の場合にしても、連  
体形シルと訓ませるためには「知」だけでよ  
いのであって、何も「所知」と記載する必要  
はないのである。(前掲書)

二

ここで「知」を中心に集中の用字を一覧しま  
す。(算用数字は使用回数)

知る(四段他動詞)

知<sup>しら</sup>16 白<sup>しら</sup>8 之<sup>しら</sup>良<sup>しら</sup>30 思<sup>しら</sup>良<sup>しら</sup>9 志<sup>しら</sup>良<sup>しら</sup>2 知<sup>しら</sup>之<sup>しら</sup>  
1 知<sup>しり</sup>27 之<sup>しり</sup>里<sup>しり</sup>1 之<sup>しり</sup>理<sup>しり</sup>1 思<sup>しり</sup>理<sup>しり</sup>1 西<sup>しり</sup>里<sup>しり</sup>1  
知<sup>しる</sup>29 之<sup>しる</sup>流<sup>しる</sup>1 師<sup>しる</sup>流<sup>しる</sup>1 志<sup>しる</sup>流<sup>しる</sup>1 知<sup>しれ</sup>2

知る(下二段自動詞)

しれ 1 所知 1 令知 2

知れり (知っている)  
しれら 3 知 2 知有 1 之礼礼 1

知らゆ (知られる)  
しれえ 2 所知 8 之良延 1 所知 6

領らす (四段他動詞)  
しれさ 1 所知 4 之良志 4 所知 11 志良之 1  
しらす 3 領為 1 知 2

領る (他動詞)  
しり 3 之利 1 知 2 知 1

「知らゆ」の「ゆ」は受身の助動詞です。「所知」と表記されて当然です。「領らす」の「す」は尊敬を示します。たとえば、

久堅の天所知ぬる君故に…… (100 人麿)

この「所知」は「領る」ではなく、「領らす」と尊敬に訓むのです。もとは、君によって天が「領有され、支配される」ところから、受身の「所知」の形で表記されたと思われま

す。所は何々する所の義の用法。(全注釈) 沢瀉氏注釈, 同解<sup>(2)</sup>

だったら、四段「知る」の連体形も「所知」とあっていいはず。更には、「恋ふる」君なども「所恋」とあって当然です。そのような例は一つもありません。

ともあれ、「所」が受身・尊敬の表記に充当されていることが認められました。

次に下二段の「知る」が問題になります。

春の野にあさる雉の妻恋ひにおのがあたりを人に令知つつ (1446 家持)

……わが恋ふる千重の一重も 人不令知もとなや恋ひむ…… (3272)

いかにも意志的に知らせる如き表記を用いています。結果から見てのことに過ぎません。その意を汲んで「令知」と表記したまでです。本意は自発こそ当たっているのです。

はた薄穂にはな出でと思ひたる心は所知われもよりなむ (3800)

この「所知」の訓は、

しれつ 拾穂抄

しれり 略解・古義・井上氏新考 (知らせつの意)・折口氏口訳・新校・古典全書・大成 (正宗・沢瀉両氏)

しるれ 森本氏地平社版

しらす 新訓・全釈・高木氏説総釈 (知らせた)・松岡氏有由縁歌・定本・武田氏(全注釈)・角川文庫本)・窪田氏評釈・塙書房版

自発のシラユが至極自然です。

先の訓例でも知られるように、「知」「所知」のそれぞれに四段・下二段をふり当てています。

下二段の「知る」が自発である点、当然至極なことなのです。

……わが下紐の所解日あらめや (2973)

この「所解」も四段の「解」と区別され、下二段自発を表示しています。同様に、所焼(5・269)を初め、所遣・所沾等々、いずれも自発以外のなものでもありません。

このように、「所」の表記に尊敬・受身・自発が認められます。主題歌についていえば、「所知」は「領らす」「知らゆ」と並んで、下二段「知る」が表記された可能性があります。

### 三

主題歌の「所知」は大別して2つの意味に解されています。一つは「認知する」。も一つは、「領知する」。後者の側の主なものは、

——墨繩・檜爪・注疏 (領掌せよ), 井上氏新考・小学館本 (掌る), 金子氏評釈 (守れ), 土屋氏 (短歌講座・私注)・全注釈・大系本 (支配する), 創元社講座・女性の歌・中村氏難解歌新説

この外にも相当数がこの側に属していそうです。注記がなく明確でないのです。

「認知する」の方に当たるに、シレヤの訓で、

君が代、我代の幸を知んなれば此岡の草を結びてんと也。(拾穂抄) 松岡氏古語大辞典, 同解

ヤを詠嘆の間投助詞, 「知れば」の意にとっています。それよりも次の解の方が当たっているのです。

君が代の久しからん事も、我世の長からんほども、汝ら知れりや。(代匠記)

ヤは反語。「汝ら」とせず、「吾ら」としたい。もっとも、「所知」の表記につまずきます。

右の線は先へ進められるべきでした。なのに、「シレヤ心得がたし」(略解)と、いとも簡単に捨てられてしまいました。

次に、シラムの訓で、「知る」のを自分達とす

るのは、——燈・全釈（知りたいものです）・川田氏女流歌人（うらなってみましょう）。

草を結ぶことによって寿命をうらない知ることも聞きません。シラムを選ぶ限り、草根が知るのです。シルヤのヤは詠嘆と通解されていて、従って、ほとんどシラムと同義に解されています。代表で一つずつ訳文を掲げます。

シラム 君が齢も、吾が齢も知ってゐるだらうところの磐といふ愛でたい名を負ってゐるこの磐代の岡の草を、いざ、祝って結ばうよ。（窪田氏評釈）

シルヤ あなたの御齢も、私の齢も知ってゐるこの磐代の岡の草を、さあ行末を祝って結びませう。（佐々木氏評釈）

同じならば、「哉」を生かしたシルヤが選ばれます。ただし、次の見解に完全には承服しかねます。

「知るや」の「や」は上の動詞・助動詞と下の名詞との間に挿入された詠嘆の助詞で、語意はその上の用言が下の名詞につづくものである。「天なるや日月」（3246）、「さを鹿の伏すや草むら」（3530）などの例である。（沢瀉氏注釈）

承服しかねたのは文法上の点ではありません。「や」をもっと生かした釈義を求め、もっと平板でない受けとり方がしたかったのです。「所知」の表記にも疑問がのこされたままになっています。

次に、「所知」の表記にみあう訓の一つがシラレムです。その意は、

「所知武」とは、後の人にしられんとよみ給へり。……君が代、吾が代のしるしにせんよみ給ふなるべし。（僻案抄）

「哉」を「武」に改字したことが致命的です。また、後人に知られるために結ぶのではありません。

シラレム乃至シラエムの訓は筋が通ります。ただし、「哉」の改字に尻ごみします。歌調の平板なことも満足の限りではありません。

#### 四

「領知する」の場合、シル・シラスの二訓がありました。「所知」の表記にふさわしい訓は後者であることはさきに一言した通りです。そこでシ

ラスをシラム・シルヤ・シレヤに対応させれば次のようになります。

シラサム 「哉」をムとよむ。領らすであろうところの磐代の……

シラスヤ ヤは間投助詞。領らすところの磐代の……

シラセヤ ヤは詠嘆。領らして下さいよ。磐代の……

シラサム・シラスヤにはシラム・シルヤについて述べたと同じ難がつきまといまゝ。「哉」の問題と、一歌が平板に終わってしまうことです。一例を示します。

あなたの寿命もわたしの寿命も支配してゐる、この磐代の岡の草を、さあ結びませうよ。（全注釈）

一通りのことを述べたにすぎず、心のゆらぎ・高まりといったものがほとんどありません。元暦本のシラスも右に準じて考えられます。「哉」の無視と歌調の平板さは致命的です。

岡のほとりの草葉を結んで、我等の運命を祝はうとする。しかしそれはごく軽い意味での、旅行中のある夕べなどの出来事であらう。君と共に旅行される親しい情愛をよくあらはしてゐる。（同書）総釈、同文

この鑑賞言も疑われます。原歌はもっと心躍りがあってしかるべきです。も一つ難点があります。第二句が字余りになることです。その難を免れるシラセヤは、釈の方がどうでしょうか？<sup>(8)</sup>

君が御齢も、ついでに私の齢も、幾久しくどうか守ってくれよ。ではこの磐代の岡の草を、どりや結びませう。（金子氏評釈）

——守ってくれよ。ではこの磐代の……。前後の続き柄がまず過ぎます。「いざ結びてな」は見る影もありません。

ほぼこのように旧稿をつづった後、吉永氏の例の論稿が発表されました。それをここに追記します。

わたしはシレヤと訓むべきだと考えている。……これは已然形にヤの添うた形であるから、当然反語に見るべきであった。つまり、わかるはずもないのにとか、支配するはずもないのにとか解すれば何でもなかったはずである。すなわち全体は、あの方の寿命の

ことも私の寿命のことも、さきことはわからないが、(草を結べば命が延びるといいうのですから)岩代の岡の草をさあ結ぶことにいたしましょうとなって渋滞がない。(前掲書17頁)

これは代匠記に近い説です。「私たちにはわからない」と解してい、補正もありません。ただし「所知」の表記の難問は解けていません。

連体形をシレと訓ませるためには「知」だけでよいのであって、何も「所知」と記載する必要はないのである。むしろ已然形シレと訓ませたいために、「おのがあたりを人に令知つつ」(1446)などになって、「所知」と記載したのであろう。……「人に令知つつ」のシレは知られの意味であるが、シレヤの場合はもちろん借訓したものと考えるべきである。(16頁)

已然形シレと訓ませるにも「知」でこと足りません。四段のシレを表記するに下二段の受身や自発を借用するはずがありません。

17頁から引用した上掲文中に「支配するはずもないのに」という一句がありました。それは「領知」の立場です。これには別な難点が重なります。

このように解すると、「いざ結びてな」の「いざ」が死んでしまうという意見もあるにはある。つまりこの「いざ」には、そうした俗信(草木を結ぶことによって延命を願うという俗信)に対する不信を前提にしたような語気が感ぜられないというのである。(17頁)「不信を前提にしたような語気」にとどまりません。反語を使ったこの否定は絶対的な不信です。そこには「いざ」のありようがありません。その点の次の釈明は意をなしません。

しかし、上の句を家持の「玉きはる命は知らず」と同じく、自らに言い聞かせているものと考え、「いざ」はそうした意味で気のすすまぬ自らを励ますものと解すれば、それなりに結構通じるのではないだろうか。(17頁)引用の家持歌は、

玉きはる命は知らず松が枝を結ぶ心は永くとそ思ふ(1043)

このシラは「認知」のそれです。自分の運命が

これからどうなっていくかわからない。だからこそ松や草を結びます。「領知」は家持歌にも、主題歌にもあてはまらないのです。

## 五

ここに一つの存疑を書きとめ、後考に待ちたい。それは草に神性を認めることの当否です。

領所の「知る」が用いられる場合は極めて限られています。

高殿を高知座して(68 人麿)

……高知るや天の御蔭 天知るや日の御蔭の水こそは……(52 藤原宮御井歌)

……御あらかを高知座して……(167 人麿)

ここでは宮殿・屋根について、しかも「高・天」づきで慣用されています。主格は天皇。主題歌とは隔りがありすぎます。

葛城の高間の草野はや知りて標ささましを今そくやしき(1337)

この「知る」は占有する意。草野は地域的(空間的)なもの。寿命といった形而上的なものとは随分ちがひ、その点に疑問がはさまれます。ということは、「領らす」についてもいえます。

一体、集中で「領らす」の主体(左端)と客体はどうなっているかといえますと、

天皇 国6 天の下9 京2 天1

皇子 国1 天の下1 天地のよりあひのきはみ1 天3 高日1

ここでも領知の「知る」と同じことがいえません。地域的である点、「草根」・「代」に当たらないことがはっきりします。

思はぬを思ふといはば大野なる三笠の杜の神し知三(561 大伴百代)

シラスのスは絶対に尊敬です。いよいよもって「草根」にふさいけません。かくて元暦本のシラスは訓義共に捨てられます。

わが衣君に著せよとほととぎす吾を領袖に來居つつ(1961)

「領」は、古くシラセテ・ウシハキと訓まれました。

君に著せよと知らすると云意、いかにとも得がたし。(代匠記精撰本)

第4句の領は今の通用としてウナガスとよむべし。(井上氏新考)

ここに新たな定訓が求められました。

あきがほり  
商変領為との御法あらばこそ…… (3809)

「領為」はシラスの訓。天皇が「認める」の意と解せられ、主題歌には遠すぎます。

奥国領君が染屋形…… (3888)

「領」は、シラセル・ウシハクの両訓が行なわれてきました。いずれにせよ、「奥国」を「支配する」靈異の存在が「君」です。主題歌の主体・客体いずれにも遠いといわなければなりません。

あしひきの名に負ふ山菅折り伏せて君し結ばば逢はざらめやも (1477)

妹が門ゆき過ぎかねて草結ぶ風吹きとくなまたかへり見む (2056)

草そのものが神性・権威だったのではありません。いろいろな願いをこめて結ぶ料だったのです。

磐代の浜松が枝を引き結びまさきくあらばまたかへりみむ (141 有馬皇子) 143・144・146歌参照

木では松がよく選ばれています。松そのものに神性は認めかねます。同じ意図——命長かれと結んでいます。ところも同じ磐代です。磐代の土地に神性を認める向きも少くありません。南紀への要路の関係にすぎますまい。地名も関係していそうです<sup>(4)</sup>。本来どこの草木でもよかったです。家持の1043歌もここに参照されていていでしょう。

やちくさの花はうつろふ常盤なる松の小枝を吾は結ばな (4501 家持)

常盤を思わせる松や草が選ばれましたが、大事なのは「結ぶ」ことそのことに呪性を認めていたと思われまふ。古代人がしきりと結んだ紐とて、同列に考えていいと思うのです。

神さぶといなにはあらず秋草の結びし紐を解くは悲しも (1612 石川賀係女郎)

紐そのものが神性を備えていたのではなく、結ぶことに呪性があったと考えます。「言ふ」ことに呪性が認められたと同じです<sup>(6)</sup>。

## 六

主題歌の訓義を考察し、そのまま認めうるものはありませんでした。その中で代匠記と吉永氏の「認知」説に傷の浅いことを知りました。そこでは「所知」の表記が一番の難点でした。それに一応ふさうシラレン・シラスにも従いかねました。のこる途は下二段の「知る」一つです。「所知哉」

の訓義が次のように求められます。

シルレヤ 知れるか。いや、知れはしないのだ。

集中には下二段「知る」は連用形シレしか見出されません。しかし、已然形シルレを想定して不可、とは思いません。なお、第二句はレとヤがつらなっていて、字余りが許容されることを一言しておきます<sup>(6)</sup>。

古く反語のヤが動詞・助動詞の已然形を受けました。ここでは「知る」以外のものになります。用例を一、二ひいて傍証とします。そこに句切れのあることにも留意して下さい。

紫のにはへる妹をにくくあらば人妻故にわれ恋ひめやも (21 大海人皇子)

ささなみの滋賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも (31 人麿)

海原のねやはら小菅あまたあれば君は忘らす吾忘るれや (3498)

これらの例にならって、主題歌を次の如く和点し、解釈します。

君が代も吾が代も知るれや磐代の……

あなたの寿命も、私の寿命もとても知れはしない。ですから、あなたよ、ここ磐代の岡に生えている草を、さあ結びましょうよ。

「所知哉」に句切れを求める注釈は多くありません。代匠記は先に引きました。

所知哉の哉は助辞にて、ただ知レと仰する意なり。知レとは領<sup>シラセル</sup>掌<sup>シラレン</sup>れといふことなり。(注疏) 金子氏評釈、同解

これは命令形で、問題外です。句切れの点に論証を集中する石井氏(総合研究)にしても、シラムの訓に立っています。句切れは一歌に重要な変化をきたしません。

意味の上からいへばつづきますが、句法としては切れるのでありまして、これは万葉正格の二句切として尊重すべきでありませう。

(女性の歌清原氏説)

万葉正格もいけれど、シルレヤの訓、「支配してゐるかと思はれます」の釈は語法を無視しています。

シルヤ シルは支配する意で、齡を支配する、即ち齡をのべることも出来る意であらう。ヤは間投詞で、意味を強めてゐる。種々

の説があるが、歌調からいへば、ここで切る二句絶の歌と見るのがよいやうに思はれる。

(私注)

ここで句切らない通解は歌調を全く平板にしています。句切っても、シルヤの訓はわずかな救いにしかなりません。

「所知哉」前後の関係を見るに、

——何々だ(。だ)から草を結びましょう……と、通解したのは平板な説明に終わっています。代匠記の線に立った吉永氏が逆接的に連接させ、——わかるはずもないのにとか、支配するはずもないのにとか解す……(前掲書)、これでは「磐代の」以下が無意味になってしまいます。

知れはしない。だから草を結びましょう……となる時、草を結ばずにいられない哀切さが色濃くこめられます。作者の本意はここにあったはずで

す。

念のため集中に類例を探しますと、道の辺の草深百合のゆりもとと言ふ妹が命をわれ知らめやも(1467)

「命」といい、反語による「知らめやも」の強い打消しといい、句切れといい、主題歌そっくりです。一首全体の酷似は例の家持の1043歌です。偶然の一致でしょうか？もし参照されているのだとしたら、主題歌理解になよりの傍証です。直接の関係はないにしても、傍証の有効度は変わりません。家持は「知らず」、中皇命は「知るれや」(反語)、これらは本質的に別なものではありません。

「代・命」を「領る」の例は皆無です。「代・命」を「知らず」に類する例は1043歌以下5を数えます。これも一言しておきたいことです。

## 七

主題歌の批評・鑑賞には11・12歌と一括してふれました。正解されなすぎた一歌のため、改めて諸評にひとわりしないではいられません。

一首明朗にして、滞のない調べを持ってゐる。(佐々木氏評釈)

「所知哉」を反語とせず、句切れを認めない一本調子の滞りなさであってはなりません。

非常に、若い女性らしい、清いなつかしい語気のする歌で、これは女性らしいいぶきがあり、女性の体の香をさへ伝達してゐるやう

に思へる。(研究斎藤氏評) 歌境、同文

過褒とは思いません。しかし、通解からはこんなにこまやかな心ゆらぎは読みとりかねます。同じことを先に引用した全注釈の評言についてもい

わなければなりません。いや、諸評全部に……と、断言します。

うら若き兄弟などの遊びごとらしき、何となく無邪気な感じのある、和気溢るるやうな歌である。(左千夫新釈)

仲睦く、君に伴はれて行く旅の幸福感とでも

言ったやうなものが、しみじみと味はれる、やさしさのこもった歌である。(総合研究高木氏評)

重量感の溢れた歌(創元講座森本氏評)

「いざ結びてな」の結句はまるみのあるいひ方で、作者が女性であることを感じさせます。生に対する異状に大きなよろこびを内容として、調子にも張りがあり、いかにも上代人らしい熱があります。(女性の歌清原氏評)

明るい歌です。言葉のすみずみまで女性的です。しかし、ただ明るい、柔らかいだけではありません。張り・重み・深さを忘れてはならないのです。それを一語につづめれば「知るれや」です。命を意識し、その限界の前に敬虔に頭をたれています。これあるがため一歌の明るさ・柔かさはいやが上に引き立てられています。人間の有限性から目をそらしていません。暗い宿命観になっていません。そこにあるのはひとえにつつましさです。その純粹さが宿命をすら明るさに化しています。年代に限られない「若さ」だといっているのです。

一首、心深いものではあるが、明るくて、おほらかで、おのづから品位の高いものである。(窪田氏評釈)

筆者は次のように改稿したい。

純潔で、自らの宿命を見つめる目にはいささかのかげりもなく、心深い一歌であって、おのづから品位の高い珠玉に結晶している。

主題歌には同じ作者の、同じ紀温泉行の2歌が

つづいています。

吾が背子<sup>か</sup>はかりほ造らす草なくは小松の下の草を刈らさね(11歌)

吾が欲しり野鳥は見せつ底深き阿胡根の浦の

### 珠そ拾はぬ (12歌)

いかにもあどけなく、あまえている感じを受けます。それでいて、ちっともいや味を感じません。

何といふやさしい純真にうち満ちてゐることであらうか。それにうら若い女性の美しい純情である。しかも高貴な女性の気品と香気をも、作品のうちに透浸させてゐる。(伍藤氏万葉の詩精神と文化)

作者はこの時30歳に達していました。必ずしもうら若くありません。しかもこの初々しさです。その秘密には前稿でふれました。

この三首の御歌に溢れてゐる純情の精神を私は美しいと思ふのである。純情の精神とは所謂センチメンタリズムと同一のものではない。或いはまた苦勞をしない弱々しい善良さや悪意のない感傷でもない。さういふ軽薄低弱な境地よりは遙かに遠い高度に純粋な精神である。感動の純一な状態の真実を常に失はない最も高次の清潔な精神である。(同書)

この批評に全幅の賛意を表します。ただいささか補足させて下さい。

氏の訓はシラムでした。「知るれや」——この訓によって右評言は内実を獲得するのではありますまいか。——かくて一歌は人間性の根底に位置づけられ、その純情はいやが上に輝きまさると思われれます。それはセンチメンタリズムからは遙かに遠く、はるかに深いものです。その深遠さは人間存在の真実の由来します。こちたい理屈の所産ではありません。生まれながらにしてなり出でた高潔さです。このような境位に立つ主題歌の一連は単なる甘さに終わりません。無限の共感を呼びます。われわれがここに読みとるものは一片の言葉ではないのです。心情そのもののひらめきです。久遠に朽ちない光輝です。

#### 注

(1) 「間人皇女」(日本文学昭和38年3月号)です。後、単行本「文学と歴史のあいだ」(1)に収録されました。

(2) 沢瀉氏注釈が例証とするところは、  
人の所寝うまいは不寝て…… (2369)  
人の所見表は結びて人の不見…… (2851)  
……吾が下紐の所解日あらめや (2973)

……言霊の所佐国そ…… (3254)

初め2つは自発に近いものです。不寝・不見と対照させたこと自明です。3番目は完全な自発。最後も、自然に助力が行なわれる意識からの用字でなかったでしょうか？

(3)(6) 佐竹昭広氏の「万葉集短歌字余考」の次の項に該当します。

第3則 句中に、ヤ行音があり、その上にくる音節の尾母音が(i)・(e)である、即ち、ヤ行子音(j)がその上の音節の尾母音(i)・(e)と相接する時、…その字余りは差支へない。(文学14の5)

(4) 寿命を次のものに関係づけています。

磐代の「岩」 桧爪・美夫君志・左千夫新釈・石川氏短歌選・女性の歌

「岩」を名にもつ磐代 墨繩・野謂新考・正訓・全釈・豊田氏新釈・精考

神性をもつ「磐代」 折口氏口訳・全注釈・小学館本

これは全く驚きです。それらが重視されるだけ「草」の影はうすれます。一歌で一番重要なのはその「草」ではないでしょうか？

初二句は、磐の一語にかかっている。(窪田氏評釈)

これでは命の認識どころの話ではありません。次の評言を取り下げにしてしまいたいほどです。

心深いものではあるが、明るくて、おほらかに、おのづから品位の高いものである。(同書)

(5) 西村真次氏は集中の草木を結ぶ例歌を挙げて解明しています。

草或は枝を結んでゐるが、これについて国学者は様々の説明を下してゐるけれども、マジックとしての解決を試みたものはない。草或は枝を結ぶことによって、相離れている両性を結合し、遠ざかって行く人を近づかしめ、短かくなってゆく生命を伸ばそうというのであって……。

(同氏文化史的研究)

### (二) 「かく待たゆれば」

難波天皇妹、奉上在山跡皇兄御歌一首  
一日こそ人も待吉長きけをかく所待者ありかつ  
ましじ (484)

上の訓がほぼ通解になっています。次のように異説がないではありません。

(1)「待告」の本文に従ってマチツゲとよむ旧訓が捨てられていません<sup>(4)</sup>。

(2)四句の「所待者」の訓は多分に不安定です。それは釈義ともつれあって、ややこしい問題になっています。

論点は以上です。ついでに一言しておきます。「長きけを」のヲについてです。

「長きけを」は待つ目的語ではありません。第二句の「人も」が「待ち」の目的語だったように、第三句以下でも待たれるのは「人」です。「待たゆれば」の訓をとるならば、「人が待たれるので、私は」のようになるのです。

「長きけを」は「一日こそ」と対応しています。共に副詞句です。「長きけを」は「長い日数の間」と訳しましょうか。最近次の親切な解説が示されました。

ヲは経過時間を表わす。(小学館本)

## 二

旧訓マチツゲを現に支持して譲らないのは土屋氏です。

ヒトは作者の心には特定人を指して居るのであらう。マチツゲはコソの結びで、待ちつづけるの意。「告」を「吉」に作る本によればマチヨキであらうが、それでは全体がひどく軽く感ぜられ、マチヨシといふ心持も受けとりにくい。(同氏私注)

次の例歌に徴すれば、「マチヨシといふ心持も受けとりにくい」ことなど、さらさらありません。ひどく軽い、——これも主観的なものに思われます。

青丹よし奈良の大路は行きよけどこの山道は  
行きあしかりけり(3728 中臣宅守)

「人も」のヒトが「特定人を指して居る」ことはもちろんです。

アナタと二人称でいうべきところを、汎称たる「人」の語をもってしたのである。(森脇氏解釈と鑑賞)

これです。端的には皇兄その人をさしています。その人を念頭において、お会いしたい「いい方」ほどの気持ちで受けとるべきです。そのとき「人も」のモが生きてきます。

「吉」又は「告」に作る所を「去」の誤りとしてマチヌレと訓むのは感情の上からは最

も勝って居ると思ふ。(私注)

これも個人的・主観的な視点から論述しています。マチツゲの生硬さが気にされて当然です。マチヌレはもはや問題外といわざるをえません。2句までと、それ以下との照応は半殺しの有様です。

ここで一、二句に訳文を与えます。その上で三句以下の検討を始めます。

一日だけだったらいい人をさえ待ちやすいのですが、……

## 三

次の問題点の手始めとして、第四句の訓を列挙します。

a カクマタルレバ 旧訓・拾穂抄・代匠記・童蒙抄・略解・折口氏口訳・金子氏評釈・総釈石井氏説・久松氏現代語訳・全注釈・私注

a' カクマタユレバ 佐々木氏新訓・定本・符号本・森脇氏解釈・沢瀉氏(大成12・注釈)・集成

a'' カクマタユルハ 地平社版・中西氏・講談社本

b カクノミマテバ 玉の小琴・古義・井上氏新考・川田氏女流歌人・総索引

b' カクノミマタバ 全釈・新校・峯岸氏口訳・大系・塙書房版・小学館本・久松氏秀歌(講談社版)・旺文社文庫桜井氏訓

c カクシマタルバ 元・細

c' カクシマタエバ 佐々木氏評釈・古典全書

d カクマタサエバ 武田氏皇室歌人

b類のノミは「所」を「耳」の誤写とみたのです。そうした本文は一つもありません。「所」のままですなおに理解できれば自然消滅する運命です。

のこる訓はa類が圧倒的です。c・c'・dはぞっとしません。それを覚悟でこころみた訓です。アリカツマツジの推量にあわせて未然形を置こうとしたのです。b'が支持をえているのも、同じ理由によるものと思えます。

ここで検討の順序を確認しましょう。まずa類が成立可能かどうかを明かにすることです。不可能とあれば、第二段階として、b・c・d類の検証に入ることになるはずで

す。早速a類の「所待者」の釈義に当たりますと、

- (1)待たされては 久松氏現代語訳  
待たされると 全注釈・沢瀉氏注釈・集成
- (2)待ってるなければならぬとすると 折口氏口訳
- (3)待たれるのでは 金子氏評釈  
待たれるならば 総釈石井氏説  
待たれて 私注  
待たれるとすると 森脇氏解釈と鑑賞

(1)はdの訳になっています。(2)も本意からずれています。(3)を選ぶべきです。すでに幾日も待たされているのであって、その点、「待たれるので」とすべきです。それを受けて、「もう我慢が出来そうにない」ところへ現にきています。それがアrikatsumanjiでありましょう。

なお一言しておきます。訓はa'のマタユレバを選ぶべきです。

自発の助動詞ルが集中ではユとなる事が通例である。……ルの用ゐられたものは仮名書の初出は「都加播佐礼」(894)で、「於毛波流留」(3372)、「和須良礼受」(4322)など二、三あるに過ぎず、今は時代も古く、ユの方がよい。(沢瀉氏注釈)

これに従うべきです。a''は「このように待たれることは」の意で、切実さを欠きます。

#### 四

アrikatsumanjiの語釈は橋本進吉博士に負っています。主題歌においても定訓の座を動きません<sup>(2)</sup>。

マジの古形がmanjiである……。推量の助動詞manに否定のjiがついたものがその源をなすものであろうと思われる。(大系)

語の成立はそのようだったに相違ありません。

玉くしげみ室の山のさなかづらさ寝ずはつひにありかつましじ (94 鎌足)

このアrikatsumanjiは、——とても生きてはいられないでしょう……と、未来にかけた物言いです。しかし、man・ji共に、必ずしも未来の推量に限られないように、manjiも未来にわたらない場合があるのです。

やすみしし吾が大君の 夕されば見し給ふらし 明け来れば問ひ給ふらし 神岳の山の黄葉を 今日もかも問ひ給はまし…… (159 持統天皇)

八百日ゆく浜の真砂もわが恋にあにまさらじか沖つ島守 (596 笠女郎)

いずれも未来にわたりません。現在の推量にすぎません。

明日香川水ゆきまさりいや日けに恋の増者ありかつましじ (2702)

マサレバの旧訓は姿を消し、考以来マサラバが採用され、現在では武田氏の次の見解も立ち消えです。

上三句の序によっても、現にまさりているとする方がよいだろう。(増訂版全注釈)

同感です。三句に及ぶ修飾が第三句につらなっています。それが今後の想定(まさらば)だったならば実観の薄いところにとどまります。長大な修飾は実感(まされば)の所産だったはずですが。その時、一歌の中心である第五句にも実感が宿されます。やむにやまれぬ訴えゆえに一歌は歌われたはずですが。すなわち、武田氏と共に旧訓に復すべきです。

……日ましに恋が増さったので、ながらえ得ないことだろう。(武田氏上掲書)

この訳文は拙劣です。次のよう 改めましょう。

……恋がつるので生きていられそうにもないのです。

同様にして、主題歌の場合、通解の「生きていられないでしょう」は間がぬけています。

……こんなに待たされると、生きてみられようとは思ひません。(全注釈)

四、五句とも忠実な訳になっていません。

……かう待たれては居ることが出来ない。(私注)

いま現在の苦しみを訴えている点はいいのですが、次のように補正したらどうでしょう。

……こんなにあなたが待たれるので私は生きていられそうにもないのです。

さて、以上の結論として、a'を選ぶことにならぬ支障をきたしません。しかし、他の訓釈がさらに佳だったならば一考を要します。

カクノミマタバの場合、「耳」の改字は別として、さてどうかといいますが、

長い日数をこんなに待ってばかりゐるならば、堪えられないであらう。(全釈)

未来の推量に終始して、訴えるものに欠けます。カクノミマテバは、——きり返されないでしょうか？ では、待たねばいいではないか、と。待つまいとしても待たずにいられないのがマタユレバです。一見弱そうに見えて、実はぎりぎりなものがここにはひそんでいます。

カクシマタエバは、このように今後も待たなければならぬならば……と、未来の推定に主眼がおかれ、現在の嘆きは二次的なものとなります。

このようにして、マタユレバを越えるものはなく、ここに決定をみるのです。

## 五

題詞に「難波天皇」とあり、仁徳天皇が当てられています。古事記によると、天皇には異母妹が10人以上います。その一人が題詞の「天皇妹」に擬せられます。それを八田皇女と推定するのは土屋氏です。しばらく氏の論に聞きましょう。

八田皇女が後宮に入られたのを怨んで、皇后磐媛が山城に退身され、それを慕って天皇が山城に赴かれた……。山城と大和と異ってはあるが、或は其の物語に関連して、かうした歌も語り伝えられたものではあるまいか。卷二巻頭の磐媛皇后の作が伝説的のものであるのは其の場合に述べた如くである。此の作なども多分にさうした伝説的要素を有するものであらう。作風から言へば民謡的色調が濃いものといへよう。但し相聞の歌は、殊に此の巻の次々に見えるものの如きは、作者を明記するものにも民謡的なものが少ない。

(私注)

いささか引用が長すぎました。一歌を伝説的・民謡的に眺める傾向を一文に代表させたかったのです。多かれ、少なかれ、それが通念になっています。

作品そのものは、別して伝説的でも、民謡的でもありません。難波天皇を孝徳天皇と解し、「妹」を間人皇后、皇兄を中大兄皇子に擬したならば、一歌は現実の世界に息を吹きかえします。

古い調子の歌であるが、仁徳天皇の時代といふが如き古さはない。歌から言っても、やはり孝徳天皇の時代とするのが適当であらう。(全注釈)

全く同感です。

時代が余り古すぎるとか、歌柄がどうだとかいって、これを救ふのはどうであらうか。

(総釈石井氏説)

この見地に賛しません。伝説・民謡のヴェールをかけたくないのです。ヴェールは生きた肌を見えなくします。まして、生きた鼓動はつたわって来ません。

二段から成ってをり、怨言を述べて、よくその意を致してゐる。描写がないので抽象的に叙し、迫力に欠ける所がある。(全注釈)

卷二巻頭の次の磐媛歌にくらべたら激越さにおいて劣るところがありましよう。

君が行きけ長くなりぬ山尋ね迎へかゆかむ待ちにか待たむ (85 磐媛)

かくばかり恋ひつつあらずは高山の岩根しまきて死なましものを (86 同)

しかし、主題歌には心理のあやが生きいきと写されています。言辞が先走らず、心情が宿っています。

平明率直で、何の粉色もないが、真実そのものである点に人を動かす力がある。女性らしいつつましさもよく、二句切れで引締ってをるのも、古趣がある。(佐々木氏評釈)

同感です。第10・11・12歌と底流を共にしている、——このように評したら強いたことになるのでしょうか？

## 注

(1) マチヨキ以外の訓を示します。

(a) マチツゲ 旧訓・拾穂抄・童蒙抄・安藤野雁新考・折口氏口訳・金子氏評釈・私注

(b) ヒトヲモマチシ (人母待志) 古義・川田氏女流歌人

(c) ヒトモマツベキ (人母待倍吉) 井上氏新考

(d) は、助詞ヲを補読させ、モだけ「母」と表記するのは不自然です。「志」の改字も暴挙です。(c)も目にあまる誤字説です。

(2) アリカツマシジが決定的で、他を顧みるに及びません。念のため列挙しますと、

アリエタエズモ 旧訓・拾穂抄・代匠記

アリガテナクモ 考・略解・古義・折口氏口訳・川田氏女流歌人

アリガテヌカモ 井上氏新考